

スピノザにおける「観念の観念」の役割

笠松 和也

スピノザの主著『エチカ』第2部に登場する「観念の観念 (idea ideae)」という術語は、同じく近世において「観念」という語を用いるデカルト主義者にとっても、容易に理解できないものだったと思われる。この術語が意味するのは、物体が観念の対象になるのと同様に、観念それ自体も他の観念の対象になることである。スピノザによれば、観念とは単に認識された内容を表す概念ではなく、むしろ認識する作用そのものであるから、「観念の観念」とは認識する作用そのものを認識する作用、すなわち「反省的認識 (cognitio reflexiva)」¹に他ならない。それをスピノザは「知っていることを知ること」とも言い換えている。デカルトからすれば、それは「意識 (conscientia)」という名称で呼ばれる事態であろう。実際、『エチカ』においても、のちに見るように「観念の観念」を導出した定理を根拠に、「意識」という言葉が導入される箇所がある。現代の解釈者たちの多くが、「観念の観念」の核心を「意識」概念に求めるのも、こうした理由による²。

しかしながら、事柄はそれほど単純ではない。というのも、スピノザが初めて「観念の観念」という術語を用いた初期著作『知性改善論』においては、この語は「意識」という主題と結びついていないからである。「観念の観念」は、真なる観念の确实性と知性改善の方法に関わる文脈で用いられるだけである。『知性改善論』全体のコーパスを調べてみても、「観念の観念」という語が使われる節³と、「意識」ないし「意識している」という語が使われる節⁴は、全く重なっていない。明らかに、『知性改善論』と『エチカ』の間で、「観念の観念」の役割が変化しているように思われる。このことは、スピノザ哲学全体の中で、どのような意味をもつのだろうか。本稿では、両著作における「観念の観念」の役割を分析することを通して、この問題に取り組みたい。

1. 「観念の観念」の原型——『知性改善論』第33-38節

スピノザが「観念の観念」という表現を初めて導入するのは、『知性改善論』第34節である。テキストの分析を始める前に、この箇所の文脈を確認しておこう。まず、第18-24節において、四つの「知得の様式 (modus percipiendi)」が提示

される。それは、(1) 伝聞ないし慣習的な記号による知得、(2) 漠然とした経験による知得、(3) ある事物の本質を他の事物から結論する知得、(4) ある事物をその本質あるいはその最近原因の認識によって捉える知得である。そのうえで、第25–29節では、それら四つの様式を吟味した結果、四つ目の様式がわれわれにとって最上とされる。第30節以降では、それを受けて「そうした認識によって、認識されるべき諸事物をわれわれが認識する途(via)ないし方法(methodus)」

(TIE §30) が解明されることになる。その際、探求の出発点となるのは、知性もっている「本有の道具(innata instrumenta)」としての「真なる観念(idea vera)」である。これがなぜ真理を認識する方法になるかを論じる中で、「観念の観念」という表現が登場する。「真なる観念」の議論が始まる第33節からテキストを分析していきたい。

真なる観念(というのも、われわれは真なる観念をもっているのだから)は、その観念対象とは異なる何かである。つまり、一方に円があり、他方に円の観念があるということである。なぜなら、円の観念は、円のように、円周や中心をもつ何らかのものではなく、物体の観念は物体そのものではないからである。そして、[真なる観念は] その観念対象とは異なる何かであるのだから、それもまたそれ自体で知解されうる何らかのものということになるだろう。言い換えれば、観念はその形相的本質において捉えられるかぎり、他の対象的本質の対象になりうる。さらに、この他の対象的本質もまた、それ自体で観られれば、事象的で知解されうる何かになるであろう。このように無限に進む。(TIE §33)

真なる観念が探求の出発点になるのは、われわれが実際に真なる観念をもっているからである。それは「本有の道具」と言われていた。ここでは、その本有的な真なる観念がもつ特質が問題となる。はじめに、真なる観念は、その観念対象と異なると言われる。例えば、円と円の観念、物体と物体の観念はそれぞれ異なるものである。なぜなら、円の観念そのものは、円がもつ諸性質(円周や中心など)を有しておらず、物体の観念そのものも同様に、物体の諸性質を有していないからである。デカルトであれば、これらは物体と精神の本質の違い、すなわち延長と思惟の違いに帰される。だが、ここでの区別は、それを前提にしていない。しかも、真なる観念がその観念対象から区別されることは、デカルトの場合とは異なる帰結を含んでいる。鍵となるのは、「形相的本質(essentia formalis)」と「対

象的本質 (essentia objectiva)」という対である。スピノザはここで、観念対象との関係の下で考えられた観念を「象的本質」と言い換えている。それに対して、真なる観念がその観念対象から切り離されて、「それ自体で知解されうる (per se intelligibile)」場合、その真なる観念はそのかぎりにおいて、「形相的本質」をもつと位置づけられている。それゆえ、真なる観念とその観念対象の区別は、デカルトの場合とは違って、真なる観念がそれ自体で知解されうること、言い換えれば、真なる観念そのものが他の観念の対象になることを根拠づけている。こうして、真なる観念を対象とする「観念の観念」が生じ、さらにそれを対象とする「観念の観念の観念」が生じる、というように、無限に進むことになる。

さて、以上で導入された「観念の観念」は、真理を探究する上でいかなる役割を果たすのだろうか。ここでは、(1) 真なる観念の確実性、(2) 知性改善の方法、という二つの観点から探してみたい。

第一に、確実性に関しては、次のように言われる。「確実性 (certitudo) とは象的本質そのもの以外の何ものでもないことは明らかである。言い換えれば、われわれが形相的本質を感得する様式が確実性そのものである」(TIE §35)。これはどういうことだろうか。根拠となるのは、次の二つの事柄である。(1) 「私が知るためには、私が知っていることを知る必要はなく、ましてや私が知っていることを知っているということを知る必要はない」(TIE §34)。(2) 「私が知っていることを知るためには、必然的に私はそれに先立って (prius) 知っていなければならない」(TIE §34)。「知ること」を「観念をもつ」という言葉で置き換えれば、(1) によると、観念の観念をもつことは、観念をもつこととは条件ではなく、反対に(2) より、観念をもつことが、観念の観念をもつこととは条件になっている。マトゥロンが指摘するとおり⁵、この二つの言明においては、観念の観念をもたない観念が論理的に排除されていない。しかし、「それに先立って」という表現は、まず観念があり、次いで観念の観念が生じるというような時間的な先行性を示しているわけではない。あくまで観念が観念の観念に本性上先立っていることを示している。したがって、真なる観念をもっていることは、真なる観念をもっていることを知ること(真なる観念の観念をもつこと)に、本性上先立っている。言い換えれば、自らが真なる観念をもっていれば、自らが真なる観念をもっていることを必然的に知っている。真なる観念をもてば、その観念が真であることが必然的に分かるのである。ここにおいて、自らがもつ観念が真であるか偽であるか分からないという状態は排除される。こうした真なる観念の性格を、スピノザは「真理はいかなる徴 (signum) も必要ない」(TIE §36)あるいは「真理は自己自身を明らかにす

る (veritas [...] se ipsam patefacit)」(TIE §44) と表現する。対象的本質としての観念そのものが確実性であるとされるのは、この意味においてである。

第二に、知性改善の方法については、「方法 (methodus) とは、反省的認識ないし観念の観念以外の何ものでもない」(TIE §38) とされるが、これもまた注釈が必要である。「方法」という言葉が導入される第36節に戻って考えよう。そこでは、われわれが今確認した真なる観念の確実性を根拠にして、次のように言われている。真なる方法とは、「観念を獲得した後に、真理の徴を探究すること」ではなく、「適切な順序で、真理そのもの、あるいは事物の対象的本質、あるいは観念(これらはすべて同じものを意味する)が探究されるための途」である(TIE §36)。つまり、知性改善の方法とは、自らのもつ観念が真であるか偽であるか吟味することに存するのではなく、真なる観念そのものを探究することに存する。さらに、第37節によれば、「[方法とは] 真なる観念をそのほかの知得から区別し、その本性を調べることによって、真なる観念とは何であるかを知解することである。それにより、われわれは自らの知解する力能を知り、さらには知解されるべきすべてのものをその規範にしたがって知解するように、精神に補助手段として一定の規則を与え、精神が無益なものに煩わされないようにすることによって、精神を抑制するのである」(TIE §37)。要するに、自らが本有的にもっている真なる観念の確実性を真理の探究の足場とすること、そしてその真なる観念の本性を捉え、そこに含まれる規範にしたがって、真理の探究を進めていくことが、ここでいう「方法」なのである。

もちろんこうした方法に対しては、探究の出発点となる本有的な真なる観念とはいったい何なのかが別に問われるべきである⁶。また、探究を進める上で、いかにして「最高完全者 (ens perfectissimum)」の観念に到達するのも大きな問題となる。だが、少なくとも以上の考察から、「観念の観念」という発想が、真なる観念の確実性と知性改善の方法という『知性改善論』全体を支える主題において、決定的な役割を果たしているといえる。この役割が『エチカ』ではどのように受け継がれ、どのように変化するのかを解明することが、次節以降の課題である。

2. 真なる観念の確実性——『エチカ』第2部定理43

真なる観念の確実性と知性改善の方法という二つの観点から『エチカ』を見た場合、まず気付くのは『エチカ』では「方法 (methodus)」という言葉がほとんど用いられないということである。用例は2箇所のみで、そのどちらも方法を積極

的に規定する記述ではない。これは、スピノザ自身の思索の発展と両著作の性格の違いという二つの面から評価すべきだが、少なくとも『エチカ』では、『知性改善論』のように、観念の観念は明示的に「方法」として提示されることはない。

他方、真なる観念の確実性に関しては、『知性改善論』の記述と対応するものが見つかる。『エチカ』第2部定理43がそれである。「真なる観念をもつ者は、同時に自らが真なる観念をもっていることを知っており、その事物の真理について疑うことはできない」(E2P43)。以下、この定理の証明と備考を分析することを通して、『エチカ』における真なる観念の性格を取り出してみたい。

まず、定理43の証明から吟味を始めよう。この証明は、「われわれのうちにある観念 (idea in nobis)」と「神のうちにある観念 (idea in Deo)」という対を軸にして進められる。再構成すれば、次のとおりである。(1) われわれのうちにある真なる観念は、人間精神の本性によって説明されるかぎりの神のうちで十全な観念である。(2) 人間精神の本性によって説明されるかぎりの神のうちに、十全な観念 A があると仮定する。(3) すると、神のうちには、十全な観念 A と同じ仕方で (eodem modo)、十全な観念 A の観念もまた必然的に存在する。(4) ところで、(2) の仮定より、この十全な観念 A は、人間精神の本性によって説明されるかぎりの神に帰せられていた。(5) したがって、(3) でいう十全な観念 A の観念もまた、十全な観念 A と同じ仕方で (eodem modo)、人間精神の本性によって説明されるかぎりの神に帰せられる。(6) 言い換えれば、(1) の前提より、十全な観念 A の観念は、われわれのうちにある真なるものとして存在する。(7) つまり、われわれは真なる観念をもつと同時に、真なる観念の観念をもつ。したがって、われわれは真なる観念をもっていることを知っている。

以上の証明で要となるのは (3) である。ここで「同じ仕方」でと言われることで、十全な観念 A と同様に、十全な観念 A の観念もまた、人間精神の本性によって説明されるかぎりの神のうちに存在することが帰結するからである。だが、「同じ仕方」とはどういうことだろうか。これを解明するには、この証明で参照されている第2部定理20を経て、さらに第2部定理7に遡らなくてはならない。というのも、定理20で用いられる「同じ仕方」でという表現は、定理7を根拠にしているからである。その定理7とは次のとおりである。「諸観念の秩序と連結は、諸事物の秩序と連結と同じである」(E2P7)。言い換えれば、観念どうしの秩序と連結は、その観念対象どうしの秩序と連結と同じである。これを上記の(3)に当てはめれば、観念対象としての十全な観念 A が属する秩序と連結と、十全な観念 A の観念が属する秩序と連結は、同じということになる。つまり、どちらも

人間精神の本性によって説明されるかぎりの神のうちで捉えられる同じ秩序と連結に属するといえる。それゆえ、(3) から (5) まで推論を進めることができる。

この証明そのものは、『知性改善論』には見られなかったものである。とりわけ「われわれのうちにある観念」と「神のうちにある観念」という対を軸にしている点は、『エチカ』特有である。しかし、それ以外については、『知性改善論』の思考を引き継いでいると思われる箇所がいくつかある。同定理の備考にも目を向けながら、『知性改善論』と共通する点を取り出してみたい。

まず、『知性改善論』において「観念の観念」を導出する上で鍵となっていた「形相的本質」と「対象の本質」の対に関しては、定理 43 証明そのものには出てこないが、同様の対が定理 7 系に見られる。「神の無限の本性から形相的に (formaliter) 生じるものはすべて、神の観念から同じ秩序と同じ連結で、神のうちに对象的に (objective) 生じる」(E2P7C) ⁷。また、「それ自体で知解されうる」という真なる観念の性格は、「十全な観念」の定義のうちに既に含まれている。「十全な観念とは、対象との関係なしにそれ自体で (in se sine relatione ad objectum) 考察されるかぎり、真なる観念のすべての特質ないし内的規定をもっている、そうした観念であると私は知解する」(E2Def4)。さらに、真なる観念の確実性については、上記の定理 43 証明の末尾において、真なる観念をもつ者は、「同時に自らの認識について十全な観念ないし真なる認識をもたなければならない、つまり (それ自体で明らかのように) 同時に確実でなければならない」(E2P43D) とされていた。これを同備考では、「真なる観念をもつ者で、真なる観念が最高の確実性を含んでいることを知らない者はいない」(E2P43S) と表現している。これらには、真なる観念の確実性が、真なる観念そのものから引き出されるという『知性改善論』の発想が引き継がれている。

では、定理 43 そのもの、すなわち「真なる観念をもつ者は、同時に自らが真なる観念をもっていることを知っており、その事物の真理について疑うことはできない」という文に含まれる「同時に (simul)」という表現はどうだろうか。というのも、『知性改善論』では、前節で見たように、「私が知っていることを知るためには、必然的に私はそれに先立って (prius) 知っていなければならない」(TIE §34) と言われていたからである。一見すると、前者が同時性、後者が先行性を述べており、両者は食い違っているように思われる。しかし、定理 43 備考では、次のようにも言われている。「ある事物を先立って (prius) 知解していなければ、自分がその事物を知解していると誰が知り得るだろうか。言い換えれば、ある事物について先立って確実でなければ、自分がその事物について確実であると誰が知り得

るだろうか」(E2P43S)。これはまさに『知性改善論』と同様に、観念が観念の観念に本性上先立っていることを示している。それゆえ、定理 43 の文における「同時に」という表現は、この本性上の先行性と矛盾するものではない。むしろこの表現が示しているのは、いかなる観念でも、神のうちにはその観念についての認識（観念の観念）が与えられているという事実である。したがって、ここでは、観念が観念の観念に本性上先立つことが主張されつつも、観念の観念をもたない観念が論理的に排除されている。この点で、定理 43 における「同時に」という表現は、『知性改善論』の発想と矛盾するどころか、むしろそれを徹底化しているといえる。

以上より、われわれはマトゥロンとともに⁸、『知性改善論』における「観念の観念」の発想は、基本的には『エチカ』にも受け継がれていると結論づけることができる。しかし、だからといって、『エチカ』における「観念の観念」の役割が、『知性改善論』の場合と同じであるわけではない。われわれは、定理 43 備考の最初の一文にも注意を払うべきである。そこでは、定理 43 について次のように言われている。「この部の定理 21 備考において、観念の観念とは何か、私は説明したが、先の定理 [=定理 43] がそれ自体で十分に明らかであることは注意されるべきである」(E2P43S)。つまり、『エチカ』においては、「観念の観念」という発想を導入しなくても、真なる観念がそれ自体で確実であることは明らかなのである。この点において、「観念の観念」を「方法」として据える『知性改善論』とは、「観念の観念」の役割の重みが異なっている⁹。

では、『エチカ』における「観念の観念」の役割は、『知性改善論』よりも後退したといえるのだろうか。もちろん、そうではない。というのも、「観念の観念」は、定理 43 に先立ち、第 2 部定理 20-23 において、『知性改善論』には見られなかった別の役割が与えられているからである。それが、精神の自己認識としての「観念の観念」である。それゆえ、次節ではこのもう一つの「観念の観念」の役割を解明することへと向かいたい。

3. 「精神の観念」——『エチカ』第 2 部定理 20-23

『エチカ』において、最初に「観念の観念」が定式化される箇所が、第 2 部定理 20-23 である。まず、定理の内容を掲げておこう。

定理 20 人間身体の観念ないし認識と同じ仕方で神のうちに生じ、同じ仕方

で神に帰される、人間精神の観念ないし認識もまた、神のうちにある。

定理 21 この精神の観念は、精神そのものが身体と合一するのと同じ仕方で、精神と合一している。

定理 22 人間精神は身体の変状 (affectiones) だけでなく、この変状の観念も知得する。

定理 23 精神は身体の変状の観念を知得するかぎりでしか、自己自身を認識しない。

一連の定理で主題となっているのは、人間精神の自己認識である。『エチカ』において、人間精神は人間身体を知る活動そのものと位置づけられ、それ自体が人間身体を対象とした観念として規定される。そのため、人間精神の自己認識、すなわち「精神の観念 (idea mentis)」は、ただちに「精神の観念、すなわち観念の観念」(E2P21S) と言い換えられる。ここで、「観念の観念」という発想が、人間精神がもつ真なる観念の認識ではなく、人間精神の自己認識を解明するために用いられている点に注意しておきたい。

では、定理 20-23 における「観念の観念」は、いかなる役割をもっているのだろうか。一連の定理を概観することから始めよう。まず、四つの定理は、ゲルーやマシユレが指摘するとおり¹⁰、前半と後半に分かれる。はじめに、定理 20 と定理 21 で、人間精神の観念が神のうちにあること、そして神のうちでこの精神の観念が精神そのものと「同じもの (idem)」であることが示される。次いで、定理 22 と定理 23 では、今度は神のうちにある人間精神の観念ではなく、人間精神自身のうちにある人間精神の観念へと議論が移る。そこでは、人間精神が身体の変状の観念を知得すること、そしてそうした知得によってのみ、人間精神が自己自身を認識することが示される。

上記のうち、前半における「観念の観念」の導出は、前節で確認した十全な観念 A の観念が生じる場合と同じ論理にしたがっている。つまり、いかなる観念であれ、神のうちにはその観念についての認識 (観念の観念) があるのだから、人間身体を対象とする観念としての人間精神についても、神のうちにはその精神の観念が存在する。しかも、観念どうしの秩序と連結は、観念対象どうしの秩序と連結と同じであるから、人間精神の観念は人間精神そのものと同じものである。ここまでは、人間精神がもつ真なる観念の認識を示した第 2 部定理 43 の場合と変わらない。問題となるのは、後半である。というのも、真なる観念の認識の場合と違って、人間精神は「身体の変状の観念を知得するかぎり」という条件付き

でしか、人間精神の観念をもたないからである。この違いは、「観念の観念」の役割とどのように関わっているのだろうか。焦点となる定理 23 の証明を再構成しながら考えてみたい。

はじめに、定理 23 証明に含まれる三つの水準を区別しておこう。それは、(1) 人間身体が外的物体によって変化を被る水準、(2) 人間精神がそのことを知る水準、(3) 人間精神がそのことを知っていることを知る水準である。(1) と (2)、(2) と (3) は、それぞれ観念対象と観念の関係になっている。この中で「観念の観念」という発想がどのように用いられるのか、三つの水準を順に追いついていこう。

まず、(1) の水準では、人間身体は外的物体の触発を受けて変化する。この変化した状態が「人間身体の変状 (*affectiones corporis humani*)」と呼ばれる。例えば、人間身体の表面に何か堅いものが当たったとしよう。その時に生じる身体の表面上の凹みや傷は、人間身体の変状である。このように、人間身体の変状とは、人間身体と外的物体の両者によって生じる結果であるから、その意味でそうした変状の観念には、人間身体の本性と外的物体の本性が同時に含意されている。ゆえに、「人間身体が外的物体から変状を受ける各々の仕方の観念は、人間身体の本性と同時に、外的物体の本性も含まなければならない」(E2P16)。

次に、(2) の水準において、人間精神は自らの身体が変化したことを認識する。この時、人間精神は、人間身体の変状の観念を直接もつわけではなく、人間身体の変状の観念を介して、人間身体の本性をもつとされる。なぜなら、人間身体は絶えず他の多くの物体との関係の下で規定されるため、人間身体の本性を直接的にもつには、あらゆる物体の本性を同時にもたなければならないからである。しかし、人間精神は神のように無限な力能をもたないため、あらゆる物体の本性を同時にもつことはできない。それゆえ、人間精神は人間身体の変状の観念に含まれる人間身体の本性をもとに、間接的に人間身体の本性をもつしかない。つまり、「人間精神は、身体が受ける変状の観念によってしか、人間身体そのものを認識せず、またそれが実在することを知らない」(E2P19)。

そのうえで、定理 23 証明では、さらに (3) の水準が考えられる。この水準では、人間精神は自らが人間身体を知っているということを知っている。言い換えれば、人間精神は人間身体の本性の観念をもつ。ただし、ここで知られている事柄は、(2) の水準で見たとおり、あくまでも人間身体の変状の観念を介した、人間身体についての間接的な知でしかない。ゆえに、人間精神は、人間身体の変状の観念を介することによってのみ、人間身体の本性の観念をもつといえる。とこ

ろで、この人間身体の観念とは、人間精神に他ならない。というのも、人間精神は、人間身体を知る活動そのものであり、人間身体を対象とした観念として規定されていたからである。したがって、上述の結論は次のようになる。「精神は身体の変状の観念を知得するかぎりでしか、自己自身を認識しない」(E2P23)。これは定理23そのものである。

以上の再構成において、「観念の観念」という発想が用いられたのは、(2)の水準から(3)の水準を導出する時、すなわち人間精神が人間身体を認識する水準から、人間精神が自己自身を認識する水準へと移行する時である。人間精神は人間身体の変状の観念を介することによって、人間身体の観念をもつが、それと同時に、人間身体の観念の観念、すなわち人間精神自身の観念をもつ。こうした自己知のあり方は、観念と観念の観念という対が導入されなければ、証明することはできない。つまり、人間精神が自己の身体と精神を間接的にかつ同時に知るといふ、この自己知のあり方を規定することこそが、定理20-23における「観念の観念」の役割なのである¹¹。

では、「観念の観念」のこうした役割は、『エチカ』全体に対してどのような意義をもつのだろうか。ここでは特に『エチカ』第3部以降で鍵となる欲望概念との関係を明らかにしておきたい。

はじめに、第2部定理20-23で「観念の観念」を介して導入された自己知は、第3部定理9証明で「意識」という言葉に置き換えられる。「[精神]は身体の変状の観念によって、必然的に自己を意識している (*sui sit conscia*)」(E3P9D)。だが、この置き換えは、一般に「意識」と呼ばれる事象を解明するためというより、欲望概念を導入するためのものである。実際、この箇所の直後で「欲望」は次のように定義されている。「欲望 (*cupiditas*)とは、その意識を伴った欲求 (*appetitus*)である」(E3P9D)。言い換えれば、欲求はそれが意識されている場合には、「欲望」と呼ばれるのである。

この定義は、『エチカ』全体を貫く次の定式と密接に関わっている。「人間は自らを自由であると思い込んでいる。なぜなら、人間は自己の意欲 (*volitio*) や自己の欲求 (*appetitus*) を意識しているが、何によって欲求したり意欲したりすることへと駆られるのか、その原因を知らないため、そうした原因については夢にも考えないからである」(E1App)。欲望ないし欲求とは、何らかのことを為すように規定された人間の本質そのものである。問題は、それが何によって規定されているかである。第1部定義7にしたがえば、ある事物が自らの本性のみによって規定されている場合には、その事物は「自由である」とされ、他のものの本性によ

って規定されている場合には、「強制されている」とされる。しかしながら、前述したとおり、人間が自己を知るのは、「観念の観念」を介した間接的な仕方によってでしかない。人間精神は、自己の身体や精神自身を意識しつつも、自己の身体の変状がいかなる原因によって生じたのか、十全に認識していないのである。つまり、この水準においては、自己の活動が自らによって規定されているのか、他のものによって規定されているのか知らない。自己の活動を規定する原因があることを考えないために、言い換えれば、何ものにも規定されていないと信じるために、人間精神は自らが自由であると思い込んでいる。これがこの箇所で行われている「自由」である。そして、人間は自らが自由であると思い込むことによって、自らのために何かを為そうと目的論的な世界を構想し¹²、作用因の秩序を転倒させてしまう。これこそが、真理を探究する以前の人間の初期状態である。したがって、「観念の観念」という発想は、欲望概念の位置づけを画定することで、人間精神の本性から人間の初期状態を導出し、そこに真理の探究の出発点を据えることを可能にしている。

4. 結論

われわれは『知性改善論』における「観念の観念」の役割を解明することから出発した。この著作では、「観念の観念」は、真なる観念の確実性と、知性改善の方法に関わっていた。他方、『エチカ』においては、「方法」という語は積極的に規定されないが、第2部定理43では、「観念の観念」によって、真なる観念がそれ自体で確実であることを論証するという発想は引き継がれていた。ただし、真なる観念の確実性は、それ自体で明らかであるとされ、「観念の観念」の役割は、『知性改善論』よりも後景に退いていた。それに対して、第2部定理20-23において、「観念の観念」にもう一つの役割が与えられた。それは、人間精神が自己の身体と精神を間接的にかつ同時に知るという人間の自己知のあり方を規定する役割であった。これは、『エチカ』全体から見れば、欲望概念の位置づけを画定することで、真理の探究以前の人間の初期状態がいかなるものであるかを人間精神の本性から導出し、そこに真理の探究の出発点を据えるという意義をもっていた。本稿の考察をまとめれば、以上のようなことになる。

このことを改めて『知性改善論』と突き合わせて考えてみるならば、同書においては、真理の探究の出発点における人間の初期状態は、モローが強調したように¹³、「経験 (experientia)」から引き出されていたことが思い起こされる。『知性改

善論』冒頭の一文が示すとおり、真理の探究の出発点となったのは、一人称としての「私」が普段の生活においてしばしば生じるあらゆることが空虚で無益であると経験から教えられたことであった。もちろん、『知性改善論』と『エチカ』は、著作の性格そのものが異なるため、『知性改善論』から『エチカ』への展開をどのように評価するのには慎重にならなければならないが¹⁴、少なくとも「観念の観念」の役割の変化に目を向けた場合、『エチカ』においてその役割が拡張されたことで、人間の初期状態を人間精神の本性から解明することが可能になったと言える。こうした視点から『エチカ』を読むことで、『エチカ』における自己知の役割を照らし出すことができるように思われる。

本研究は JSPS 特別研究員奨励費(課題番号 15J09245)の助成を受けたものである。

¹『知性改善論』における「反省的認識」という表現は、ドゥルーズが指摘するとおり、主体としての精神が自らを認識するという意味合いを含んでいない。むしろ、観念の観念、観念の観念の観念、……というように、観念が無際限に二重化していく物理的な特質として捉えるべきである(Deleuze 1981, 82)。その点で、「反照的認識」ないし「反射的認識」という訳語も考えることができる。だが、同時代の *reflexio* という語の多義性と関連づけられるように、本稿では従来通り「反省的認識」としておく。

²『エチカ』第2部定理20-23における「観念の観念」を、「意識」という主題の下で解釈すべきかどうかについては、英米圏を中心に論争があった。まず、一般的には、ゲルーやドゥルーズが指摘するように、定理20-23の主題は「意識」であると言われていた(Gueroult 1974, 245 および Deleuze 1981, 82)。それに対して、ベネットは、もしこれらの定理が「意識」を論じているとするならば、「不条理なまでに過剰である(absurdly excessive)」と主張する。というのも、人間精神は自らのうちに生じた事態をすべて意識するとされ、自らのうちに生じるものの意識されていない事態を説明することができないからである。それゆえ、ベネットは「人間精神のうちにある事柄が意識的に思い浮かぶこと」と、「人間が自らの精神のうちにその事柄が存在することを知らる」とは区別されるべきだと言う。それゆえ、ベネットによれば、スピノザ自身がこれらの定理を根拠に、第3部定理9や第4部定理8で「意識」について論じるのは、ミスリードに他ならない(Bennett 1984, 184-191)。こうしたベネットの解釈に対しては、多くの批判が提起されたが、最終的にはライスがベネットの読解の誤りを正しつつ、一連の論争を調停し、定理20-23はやはり「意識」を扱う諸定理であるという穏当な解釈を示した(Rice 1990)。近年では、ナドラーが、『エチカ』において人間以外の動物や無生物の意識をどう考えるのかという問いに対して、第2部定理13備考で、観念対象の事象性(*realitas*)に応じて、観念の事象性に度合いがあるとされることに着目し、「身体の観念の観念」である「意識」についても、身体の複雑性に度合いに応じて、意識の度合いを考えることができるという解釈を提起している(Nadler 2008)。また、レビュッフェは、「観念の観念」ではなく、「意識」概念からのアプローチとして、『エチカ』における「意識」の用法を次の三つに分類する。(1) 術語としてではない用法、(2) 非十全な認識に対応する用法、(3) 十全な認識に対応する用法である。そのうえで、デカルトの「意識」概念との比較を行っている(LeBuffe 2010)。しかしながら、そもそもスピノザの思索全体の中で、「観念の観念」がどのような役割をもつのかを包括的に論じた研究は、管見のかぎりでは見当たらない。これを解明しなければ、スピノザ哲学全体における「意識」概念の位置づけも明らかにならないように思われる。なお、ブンゲらが編纂した概説書の語彙集における「意識」の項では、なぜか「観念の観念」に触れずに説明が与えられている(Bunge *et al.* 2011)。また、ラモンによる語彙集では、そもそも「意識」や「観念の観念」という項が存在しない(Ramond 2007)。

³ TIE §34, §36.

⁴ TIE §47, §56.

⁵ Matheron 2011, 532-3.

⁶ これについて、『知性改善論』には次のような注が付けられている。「いかにして最初の対象の本質がわれわれに本有的に与えられるのか、ここでわれわれが論究しないことに注意してほしい。というのは、それは自然の探究 (investigatio Naturae) に属するからである。その探究において、こうしたことはより詳しく説明され、それと同時に、観念のほかには、いかなる肯定も否定も意志もないことが示される」(TIE §34 Adn)。この「自然の探究」が何を指すのかは、別に論じられるべきである。

⁷ これは『知性改善論』の次の表現とも合致する。「観念は、その観念対象が事象的に (realiter) あるのと同じ仕方、対象的に (objective) ある」(TIE §41)。それゆえ、『知性改善論』においても、形相的本質と対象的本質の間に「平行論」が見られる。しかし、佐藤によれば、この平行論は、観念と観念の観念との関係を、形相的本質と対象的本質の関係として把握したことにより生じたものであり、ここには「諸観念どうしの秩序」と「観念の観念」という異なる二つの主題の混乱が見られる。その問題点が克服されるには、『エチカ』のような、実体・属性・様態の存在把握に基づいた平行論が考えられなければならないと彼は指摘する (佐藤 2004, 87-102)。

⁸ Matheron 2011, 540.

⁹ 本稿では扱うことができなかったが、真なる観念の確実性に関しては、初期著作『短論文』も分析しなければならない。というのも、同書では、「観念の観念」という表現は見られないが、真なる観念がそれ自体で確実であることが書かれているからである。「真理は真理自身と虚偽を明らかにする。というのは、真理は真理によって、すなわち自己自身によって明晰であり、同様に虚偽は真理によって明晰だからである。しかし、虚偽は決して、それ自身によって明らかでもなければ、それ自身によって証示されるわけでもない」(KV 2/15)。この記述そのものは、『エチカ』第2部定理 43 備考に近いように思われるが、その根拠は『エチカ』とは違って、真理の明晰さそのものに求められている。「[最も明晰な諸事物は]最も明晰であると言われるからには、それとは別の明晰さがあって、それによってそれら [=最も明晰な諸事物] がより明晰になりうるということは決してない」(KV 2/15)。また、さらに複雑なことに、この箇所の直前では「意識する」という表現が見られる。「最も明晰な諸事物は、それ自体と同様に虚偽もまた認識させる。したがって、われわれがいかにしてそれを意識する (bewust) のであろうかと問うのは、きわめて愚かなことであろう」(KV 2/15)。『短論文』において、真理の確実性と意識概念がどのように結び付いているのかは、別に論じられる必要がある。

¹⁰ Gueroult 1974, 245-59. & Macherey 1997, 195-209.

¹¹ 従来の研究のように、第2部定理 23 のみを「意識」という主題の下で捉えるよりも、定理 19 と定理 23 を一括して「自己知」として捉えた方が、『エチカ』全体を理解する上では有用であるように思われる。実際、のちに「自己充足」を規定する第3部定理 30 と定理 53 では、第2部定理 19 と定理 23 の両方が参照されている。

¹² 善悪をはじめとするあらゆる相対的な概念が生じるのも、このように目的論的な世界を構想することによってである。「人間は、生じるあらゆることが自らのために生じると思いついでからは、自らにとって最も有用であるものを、各々の事物の中で最重要と判断し、最も良く変状を受けたものすべてを最も卓越していると評価しなければならなかった。そこから、彼らは諸事物の本性を説明する次のような諸概念、つまり善、悪、秩序、混乱、暖かさ、冷たさ、美、醜といった諸概念を形成しなければならなかった」(E1App)。こうした諸概念、中でもとりわけ善悪の諸概念に、人間がいかに囚われ、それによりいかに誤謬に陥りやすいかを示すのが、『エチカ』第4部定理 1-18 である。

¹³ モローは『知性改善論』冒頭を文学研究の手法を駆使しつつ分析し、「経験」の重要性を強調している。モローによれば、一人称の「私」が通常の生における経験に失望し、究極的な選択を繰り返しながら、哲学的な探究へと向かうところに、スピノザ哲学の動因がある。『知性改善論』冒頭においては、このいきさつは、他の著作には見られない緊張感をもったトーンで描かれて

いる。モローはこうした記述のジャンルが一体何なのか、それはキリスト教的な「回心」なのか、それとも哲学の勧め(プロトレプティコス)なのかと問い進めることで、テキストを多方面から分析している(Moreau 1994, 17-42)。

¹⁴『知性改善論』から『エチカ』への展開を十全に評価するには、(1)著作の性格、(2)『知性改善論』の未完の理由、(3)諸概念の配置、という三つの観点から総合的に考えなければならない。(1)に関しては、モローが指摘するとおり、『知性改善論』は、その語彙の選び方からいっても、広義のデカルト主義者(デカルトに限らず、ペイコンやホップズらの「新たな哲学」に関心を抱いていた人々)に向けて、スピノザ自身の哲学へと導くために書かれたものと推定される(Moreau 2003, 50)。それゆえ、スピノザ哲学を体系的に示す『エチカ』と単純に比較することができない。(2)に関しては、例えばマトゥロンは、両著作の間に基本的には矛盾はないと考え、未完に終わった理由を、デカルト主義者に向けた導入の書であるにもかかわらず、デカルト主義者が同意しないであろう「形相的本質」と「対象的本質」の対を前提とせざるをえなくなったため、導入の書としての重要性が下がったことにあるとしている。また、晩年のスピノザ哲学全体を「質(qualitas)」と「量(quantitas)」の対概念の下で捉えるラモンは、まさに『知性改善論』の末尾で「量の観念」が導入されたことに着目し、そこに未完の理由を見いだそうとしている(Ramond 1998, 179)。(3)に関しては、ミニーニが、『知性改善論』では身体の観念としての精神が見られないことや、認識の様式が三つではなく四つとされていることなどから、『知性改善論』と『エチカ』の断絶を強調し、むしろ『短論文』の方が『エチカ』に近いことを指摘している(Mignini 2007, 15-9)。

[凡例]

スピノザの著作からの引用はGebhardt版に依ったが、適宜OP版、NS版、PUF版、ヴァチカン草稿を参照した。引用箇所の表記は、『知性改善論』(略号TIE)については、Bruder版の節番号を示した。『短論文』(略号KV)については、部と章の番号を示した。『エチカ』(略号E)については、下記の略号を用いて、例えば、第2部定理21備考はE2P21Sとなるように示した。

P = Propositio D = Demonstratio C = Corollarium S = Scholium
Def = Definitio App = Appendix

[文献表]

- Bennett, Jonathan. 1984. *A Study of Spinoza's Ethics*, Hackett.
- Bunge, Wiep van, Henri Krop, Piet Steenbakkers, and Jeroen van de Ven (eds.). 2011. *The Continuum Companion to Spinoza*, Continuum.
- Deleuze, Gilles. 1981. *Spinoza : Philosophie pratique*, Minuit.
- Gueroult, Martial. 1974. *Spinoza II : L'âme*, Aubier-Montaigne.
- LeBuffé, Michael. 2010. "Theories about Consciousness in Spinoza's *Ethics*," *Philosophical Review*, 119 (4), 531-63.
- Macherey, Pierre. 1997. *Introduction à l'Éthique de Spinoza II : La réalité mentale*, PUF.
- Matheron, Alexandre. 2011. *Études sur Spinoza et les philosophies de l'âge classique*, ENS.
- Mignini, Filippo. 2007. "Introduzione," in *Spinoza Opere*, Filippo Mignini (ed.), Mondadori, 5-19.
- Moreau, Pierre-François. 1994. *Spinoza : L'expérience et l'éternité*, PUF.
- . 2003. *Spinoza et le spinozisme*, PUF.
- Nadler, Steven. 2008. "Spinoza and Consciousness," *Mind*, 117 (467), 575-601.
- Ramond, Charles. 1998. *Spinoza et la pensée moderne : Constitutions de l'objectivité*, L'Harmattan.
- . 2007. *Dictionnaire Spinoza*, Ellipses.
- Rice, Lee. 1990. "Reflexive Ideas in Spinoza," *Journal of the History of Philosophy*, 28(2), 201-11.
- 佐藤一郎. 2004. 『個と無限——スピノザ雑考』, 風行社.